

氏 名	こばやし みか 小 林 美 香
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 2 9 6 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	写真の展示空間 ― 「写真を見る歴史」の ― 考察 (主査)
審 査 委 員	教 授 大橋 良介 教 授 太田 喬夫 教 授 並木 誠士

### 論文内容の要旨

本論文は、19世紀から現代にいたるまでの写真史を、「展示」とその「言説」とをめぐる歴史として、ないしは「写真を見る / 見せる歴史」として、論じるものである。その歴史は4段階に分けられる。

第一段階は、ニューヨークの「291ギャラリー」を舞台とするピクトリア写真運動がその主なる中心をなし、写真の価値を写真家自らが主張する時代だとされる。

第二段階は、美術史家やキュレーターが情報伝達手段として写真を展示し、個々の写真よりも展示の方法に工夫をこらした時代である。1940年にニューヨーク近代美術館に開設された写真部門が、その中心的な役割を果たした。第二次世界大戦勃発直後の「勝利への道」展が、クローズアップされる。

第三段階は、展覧会を通して写真表現というものの理論化がはかられ、系譜づけられる時代。写真を収集する美術館等の活動や美術市場の拡大、それに伴っての写真理論の展開、等に焦点が当てられる。

第四段階は、「写真の制度」に対して種々の疑問や批判が提出されるポストモダニズムの時代で、特にインスタレーション・アートに焦点が当てられる。

かくして、写真の展示空間の変遷とその意義とが浮かび上がってくる。

### 論文審査の結果の要旨

写真は絵画や彫刻とちがって、最初から「芸術作品」という位置づけを得たわけではない。したがって、写真がどのようにして芸術としての地位を確立してきたかが、写真史のひとつの焦点となる。また複製技術の製品であるから、前世紀から膨大な量が産出された割には、消耗品として消滅していった面もあり、研究においては資料の選択と確保も課題となる。さらに、写真は情報伝達的手段としても種々の機能を果たしてきたから、写真史の研究は社会や文化の動向への目配りをも要請する。小林氏は写真史の焦点を「展示」行為とその「言説」という場面に収斂させることにより、こういった種々の観点の要請を、ひとつの総合的な視点へとまとめた。こういっ

た、従来の研究にはなかった視点をもったこと、それによって膨大な資料をよく見通し得たこと、また写真史を四つの段階に区分して、問題史として再構成したこと、等が評価された。細部の表現において改善すべき個所が若干見られたが、これは容易に修正可能であり、すぐに修正することとなった。総じて、本論文は従来の写真史研究にひとつの寄与をなすものであり、博士論文としての水準を十分に満たすものであると評価された。

本論文の基礎となった公表論文

1) インスタレーション・アートにおける写真

— フレッド・ウィルソンのインスタレーション作品を一例に —

意匠学会会誌 『デザイン理論』 41、2002. pp. 19 - 31

2) 展示の力「勝利への道」展とヘルベルト・バイヤーの展示デザインを巡って

『美学』 212号（2002年春、掲載予定。査読済み）、掲載ページ未定

以上